



研究室メンバー紹介

①若松研究室を選ばれたきっかけ ②若松先生の魅力 ③ご自身の研究テーマ



こづか しょうじろう
小塚 翔二郎さん(修士2年)
①先生の実作が多く、経験豊富で意見を多く頂けるといった。
②生徒のやりたいことを支えつつ、良い方向へ導いてくれる。
③災害対応のための建築



い い ちひろ
飯井 千博さん(修士1年)
①先生と先輩方の良い雰囲気を見て入りたいと思った。
②個性を高められる環境を作り出している。
③都市の文化・リノベーション



みす ゆずか
三須 柚花さん(修士1年)
①建築の意匠を専門に勉強したかった。人柄が好きだから。
②良い時は良い、悪い時は悪いとはっきり言ってくれる。
③人間の価値観の違いによる建築(もの)の見え方



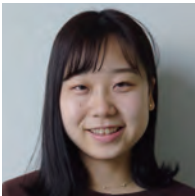
おぎわら ゆうま
萩原 悠真さん(修士1年)
①新建築などに作品が選ばれる設計者である。HPを見て、ゼミが楽しそうだった。
②気さくに話せる人柄。
③建築と自己同一性の関係



わたなべ ゆうき
渡邊 優樹さん(学部4年)
①レベルの高い同期、先輩の中で、自身の研鑽を行うため。
②尊重してくれ、無い視点の的確なアドバイスをもらえる。
③図書館の書架のレイアウト



みやざわ まりな
宮沢 麻莉奈さん(学部4年)
①建築に真摯に向き合う信頼できる先輩方が沢山いる。
②普段は優しく温厚、設計では的確な意見を伝えてくれる。
③住宅におけるヒロティ空間の構成類型



おうみ まき
近江 麻希さん(学部4年)
①自由で、先輩方との縦のつながりも多く楽しそうだった。
②個性を尊重しつつ、多彩な知識で魅力的なアドバイスがある。
③建築空間におけるヴォイド



よこぎさき
横関 あかねさん(学部4年)
①建築の輪読で生徒同士活発に議論し深く学べるといった。
②真摯に向き合い、気軽に相談できる。
③商店街における空間構成と行動誘発要素



こ やま
小山 あゆみさん(学部4年)
①先生や先輩方の雰囲気が良い。輪読に興味があった。
②自由でだから。個性を尊重してくれ。
③公共図書館におけるカフェの設置目的と空間特性



いえむら
家村 しずかさん(学部4年)
①自身の研究が自由にできると先輩を見て思った。
②生徒の活動を面白がって応援してくれる。
③建築家によるM・ハイデッガーの言説引用の傾向



さいとう あきと
斎藤 陽仁さん(修士1年)
①先輩が多い。自由に研究、設計ができる。
②自身の研究が自由にできると先輩を見て思った。
③丹下健三の思想と建築、「機能」と「表現」の統合



ますやま なおき
益山 直貴さん(修士1年)
①人数が多く、先輩後輩の縦のつながりが多い。
②建築やそれ以外のことも気軽に話せる。
③磯崎新の作品コンセプトにおける形式的表現



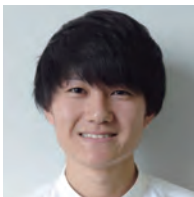
むなката まさひこ
宗形 雅彦さん(修士2年)
①自由な雰囲気、仲の良い人が多く在籍していた。
②威厳はあるが、発言しやすい環境を作ってくれる。
③無意識のシンボルの設計



うちやま ゆうか
内山 裕嘉さん(修士2年)
①輪読ゼミで、思考をさらに深められると思った。
②自由な雰囲気、個人が好きなことを探求している。
③中山道高崎宿の記憶



たけい げんき
武井 元樹さん(修士2年)
①よくしてくれた先輩方が在籍し、自然に入った。
②自由な空気をまとっている。「ふつう」の感覚を持っている。
③「つくる」ということ



たみが い まさき
爲我井 雅揮さん(修士2年)
①実作を生み出し続けている先生の下で学びたかった。
②雰囲気。穏やかだが、建築に対してストイックで熱い。
③建築のスケール



さとう けんすけ
佐藤 電介さん(修士2年)
①優しくしてもらった先輩が所属していたから。
②海外建築にも足を運び、幅広い視点を持っている。
③農村地域における地域性

『新建築』2022年10月号に掲載された、若松教授が手がけた山梨県の林間学校施設。この建物に使用した木製サッシを制作した青森県・十和田の工場にゼミ旅行で訪れた。



石黒由紀研究室 建築意匠・設計・空間デザイン

地域や歴史の関係性の中で建築を考え、創造的に実践する

数寄屋大工と宮大工の先祖をもち、「ありそうでなかったものを面白がって工夫してつくる」ことへのDNAがあるのではないかと自らを語る石黒由紀准教授。周辺の人々と環境に誠実なもののづくりの姿勢を大切にしているという自身のポリシーと、大学という環境を活かした研究活動を探る。



石黒准教授の指導のもと、研究室所属の学生達がそれぞれの個性を活かし共鳴し合いながら楽しく力を合わせる。

建築をはじめ、インテリア、まちや都市に関わる場づくりなど、多岐にわたるデザインを手がけている石黒由紀准教授。27年間継続してきた自身の設計事務所をもち、大学との二つの活動拠点で実践を通して建築と周辺地域のデザインを探究している。地方の大学でこそ取り組む意義があるという、地域環境に関わる研究テーマの一つをまずは取り上げてみよう。空き家をリノベーションした「(仮称) 広瀬川コート中澤庵」というシェアハウス+まちの居場所、がその一つだ。遊休不動産にまつわる多様な背景や歴史を尊重しながらの利活用、再生を目指したという。「前橋市内を流れている広瀬川の沿岸は、萩原朔太郎記念館を擁する前橋文学館などあって、市民に親しまれている憩いの場所です。ですが、この付近

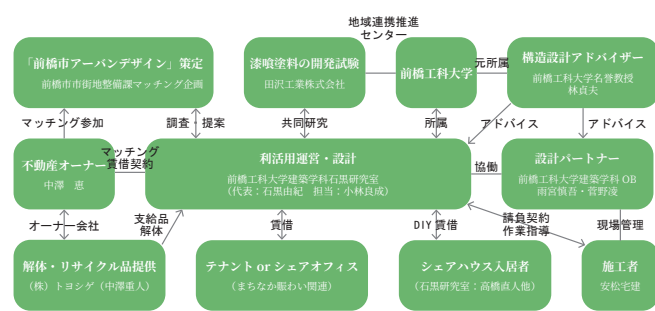
をはじめ、市内には空き家がいくつもあって、オーナーさんに利活用のイメージがない場合が多いので、学生による利活用の提案とのマッチングを行いました」このマッチングプロジェクトは、前橋工科大OBである市役所の田中隆太さんからの、広瀬川でのリノベーションファンデーションの相談を受けて始まった。「民間主体のまちづくり計画“前橋市アーバンデザイン”のモデルプロジェクトとしての具体的な取り組みでした。行政の支援のもとで、石黒研究室が利活用の提案を行い事業オーナーと、使われていない遊休不動産のオーナーをひき合わせて、事業化に向けたきっかけをつくろうとした試みでした。」ゼミ生は広瀬川沿いの空き家の実測調査をして図面をおこし、まちなかの現状のリリースをもとに学生



石黒 由紀 准教授

いしぐろ・ゆき／東京都生まれ
1990年 日本女子大学家政学部住居学科卒業
1990~93年 東京工業大学工学部建築学科研究生
1993~96年 石田敏明建築設計事務所所属
1996年 石黒由紀設計事務所 設立～現在に至る
2004~14年 横浜国立大学、東京理科大学、武蔵野美術大学、法政大学、日本大学、明治大学、日本工業大学、などに非常勤講師
2014年 前橋工科大学建築学科准教授に着任
2022年 前橋工科大学環境デザイン領域に再編～現在に至る

が空き家の事業再生プランを提案した。当時の大学院生だった小林さんと石渡さんによる、『学生が住みながら納豆菌のように徐々に建物を少しずつ良くしていく』という提案に賛同してくださったオーナーと、話し合いを進めて実現したのが「(仮称) 広瀬川コート・中澤庵」だ。ちなみに、広瀬川沿岸は、同校の堤先生や杉浦(榮)先生の研究室もBIDやランドスケープ等それぞれの分野で携わっている。「小林君が現役ゼミ生のリーダーとなり、さらに工科大OBの雨宮慎吾さんが設計パートナーとして実務の中心となって、大学や民間の様々な関係者とともに作り上げる、という、『つくり手のマッチング』も実現しました。」(次ページ「共同体制」参照)「既存の住宅の解体をしなが、あたかも歴代の職人との



【共同体制】「つくり手のマッチング」の仕組みを相關図にすると、多くの組織や人々が関わっていることが分かります。



前橋市中央広場にモバイルの屋台を設計。高さが多様な棚は柔軟な使い方が出来、各種イベント用に出張もできる。



「(仮) 広瀬川コート・中澤庵」の三和土の土間。茶室だった時代の塗り壁や繊細な欄間、二階に改修時の補強の鉄骨など、歴代のリレーのバトンを大切に受け渡すようなデザイン

対話をするような、時間を超えて同じつくり手としての読み解きをしながらいノベーションを進めました。一階の和室の天井を剥がしたら、以前のオーナーだった鉄骨屋さんが、当時既存の平家に2階を増築するために設置した、軽量鉄骨の梁が出てきました。一階の茶室を広く取るための工夫だと推測できたので、それを引き継ぎ、更に床も剥がして土間にして、天井高さの高い広間として活かしました」

また、一階の床を解体したところ、コンクリートの布基礎がなく、礎石の上に掘立の柱と束という耐震性の弱い範囲があった。この地域付近は敗戦時に焼け野原になっていることから、初期の平家部分は戦後直後の物資の少ない中で建てられたものと推定された。耐震改修は構造家の林貞夫工科大名誉教授と相談して、構造計算で確かめながら慎重かつ柔軟に補強方法の検討をしたという。OBや学生たちは、多岐にわたる実務作業のなかで気づいたことを話し合いながら、個室以外にも解体でわかった隙間空間を利用した“小さな居場所”や、住人同士が気配を感じることでできる仕掛けを提案しながら進めた。“小さな居場所”は気分に応じて選ぶことができ、建物を隅々まで使い尽くすことができる。

「大切なのは、手を動かしながらもその地域の風土や歴史、さらに広く現代社会の抱える問題など、広い視野に立って考えたり、本に書いてあるような抽象的な建築の概念的なテーマなどについて、目の前の

現実の建築を通して具体的に思考することです」

この敷地は旗竿敷地で、既存の茶室のアプローチの露路の奥に建物があり、南の茶庭が中庭のように囲まれている。これは前橋の中心市街地のまちの構成(つくり)と似ており、露路を建物内にも立体的に引き込んで裏に抜けられるようにして、まちのように行き止まりがないようにした。そして露路に“小さな居場所”を沿わせて、自分がまちにつながっている感覚を建物内にもたらしたという。また、各室の天井は小屋裏の余剰空間を有効に活かし、かまぼこ型や片流れ型としたり、家型の吹き抜けなど、多様なバリエーションがある。これは、外形の家型(外観の見えかた)と表裏をなす内部空間との対応として、部屋の位置による天井の形の可能性を思考したデザインとなっている。探究は竣工後も続いており、利用者とは月1回定例会を行い、意見交換をして使い方の追跡調査や、更なる利活用の提案も続けられている。

身体を使ってものづくりに取り組みながら建築を考える。“現場主義”で活きた学びを
研究室のプロジェクトは、地域ぐるみの学びによるネットワークにもつながっている。

「三和土ワークショップには、他の研究室の学生をはじめ、前橋市在住の市民の方々も多く参加してくださいました。石川(恒夫)先生の『版築』ワークショップご担当だった元非常勤講師の紹介の職人さんにご指導をいただいたので、その方の技術を学びたいと

いう市内の方も来られました」
実際の施工に、プロの補助として立ち会い、目の前で直に所作やタイミングを見取り、現場で意識の高い参加者との質疑などのやり取りによる対話の場に立ち会えることができるのは貴重な経験だ。また、大学での共同研究として、栃木県の企業の新しい漆喰塗料の開発の一環である実物塗装実験も、学生のワークショップとして行った。

実際の施工に、プロの補助として立ち会い、目の前で直に所作やタイミングを見取り、現場で意識の高い参加者との質疑などのやり取りによる対話の場に立ち会えることができるのは貴重な経験だ。また、大学での共同研究として、栃木県の企業の新しい漆喰塗料の開発の一環である実物塗装実験も、学生のワークショップとして行った。

**垣根の低さは学生の特権
市立大の学生という立ち位置が有利に**
「産・官・学」として、行政や地元の民間企業、住民と手を組むことができるのは、前橋工科大学の立ち位置が利点であることも多いと石黒准教授は言う。「首都圏のような大都市に比べて、学生がまちの活性化に取り組んでいる姿を地域住民が温かい目で見守ってくれている、という実感があります。都市的過ぎると管理や制度などによる細かい制約が多いようですし、逆に、地域活性に対して意識の低い地域だと理解を得られるのが難しい。また、本学は市立で、さらに群馬県で唯一建築学科が設置されている大学

という立ち位置が、地域の方々に身近に感じてもらえるのだと思います。大学が置かれているそういったポジションによる垣根の低さは学生の特権です」

以上のような恵まれた環境と、石黒研究室の体制は、建築に興味がありモノ作りが好きで、好奇心とチャレンジ精神がある学生にはうってつけた。また、実施のプロジェクトに関わってきたことは、就職活動でもアピールポイントのひとつになる。

これまでも石黒研究室では、桐生市や富岡市、過疎化の進む南牧村、などの群馬県の各地で、調査や提案、行事などを行ってきた。また、関東近圏の大学の研究室間での交流も盛んで、石黒准教授



研究室メンバー紹介

①石黒研究室を選ばれたきっかけ ②石黒先生の魅力 ③ご自身の研究テーマ



たかはし なおと
高橋 直人さん(修士2年)
①先輩方が仲良く楽しそうだった。
②普段から会話が多く相談しやすい雰囲気を作ってくれる。
③産業遺構の現代的利活用



おち なつ
越智 奈津さん(修士1年)
①建築を通して地域が抱える問題を積極的に行える。
②気付かなかった観点を的確に指摘し、時に一緒に考えてくれる。
③半外部空間



しが たつや
志賀 辰哉さん(修士1年)
①建築を通して地域が抱える問題を解決できるから。
②建築デザインや計画に対する追求心や、積極的にコミュニケーションをとる姿勢。
③歴史的建築物と周辺建築の関係性



ひろかわ こうき
廣澤 昂輝さん(学部4年)
①設計課題で自身のプランに親身なアドバイスをいただいたため。
②多方向からのアドバイスを受けられ、見守ってくれる存在。
③ブルークリズム建築における曲線デザインの手法



よしひだ かい
吉井 平さん(学部4年)
①親身にエスキースに対応いただき、先生の下で学びたかった。
②設計を計画的に考え教えてくれる。学生と一緒に作品を作り上げる。
③美術館における展示動線中の休憩スペース



おおた こうへい
太田 孝平さん(学部4年)
①実際に現場に出て、体を動かしながら学べと思った。
②一人ひとりに丁寧に接し、様々な興味を持ち挑戦されている。
③北海道の立坑槽の遺構保存



ささき はるき
佐々木 遥輝さん(学部4年)
①実践的な体験が自身の成長につながると考えた。
②生徒の相談に真摯に対応してくれる。
③慰霊建築の空間構成



ばば かく
馬場 岳さん(学士4年)
①設計の授業で親身にアドバイスをしてもらった。
②最後まで積極的に助言、協力があつた。とても行動的。
③水族館の見学動線におけるメイン水槽の配置



ほり かいと
堀越 魁徒さん(学部4年)
①先輩方が街なかで活動する姿に、同じような学生生活を送りたいと思った。
②フットワークが軽く、学生以上のエネルギーを持っている。
③農村舞台の空間構成



なかや まい
仲谷 真依さん(学部4年)
①意匠設計に興味があり、より深く学べと思った。
②学生のために時間を割き、親身に相談のってくれる。
③Instagramにおける被写体としての建築物



先輩ゼミ生が手がけた実寸軸組も、スケールを身体で感じられる教材だ